

家庭科保育領域の適時性に関する学生の意識について

池山和子・長石啓子

(1996年10月15日 受理)

The Opinion of The Students about Which School Children Should Learn
the Area of Early Childhood Education and Care in Home Economics Subject

Kazuko IKEYAMA Keiko NAGAISHI

I. 始めに

平成元年告示の学習指導要領に従って、家庭科の男女共修が平成4年度小学校に始まり、平成6年度には高校まで一貫して実現されることになった。その成果と影響については、現在様々な調査による検討と評価がなされつつあるが、その一つとして日本家庭科教育学会において小、中、高における新学習指導要領に基づく家庭科の実践についての調査がなされており、さらにその結果を踏まえて21世紀に向けての家庭科の構想が検討されつつある。現在教科としての高校までの家庭科は科目全体が、特に進学を志す児童生徒にとっては必ずしも真剣に学習する科目になっているとは言いがたい。時には家庭科そのものを不要とする意見を聞くことさえある。

最近中学校あるいは高校家庭科では、保育領域に関連して実際に保育所や幼稚園を生徒たちが訪ね、幼児とふれ合う機会を作ることが行われるようになってきており、座学中心の学習に終始しがちであった時代に比べ一味も二味も異なる学習が行われているのではないかと思われる。しかし先に述べた家庭科教育学会新構想委員会による調査報告をみても、保育領域に対する生徒の興味・関心は、食物領域の調理等と比較して必ずしも高いとは言えない。育児不安や児童虐待など子育てに関する事柄が社会問題となっている時代では、異世代とのつきあい、世話をし、幼い者を育てる力を児童生徒に育む意味でも、家庭科における保育領域の役割を見直し授業方法等についても研究することに大きな意義があると考えられる。

保育領域は、現行家庭科においては小学校では家族の生活領域内に包括されており、中学校において保育領域として独立する。制度的に小学校において保育領域をどのように位置付けるかについてはさらに詳細な検討を重ねていくことが必要と思われるが、少なくとも自分と異なる他者、特にある面で自分より弱さを備えている他者—年少者や高齢者、障害を持つ者などとの付き合い方やお世話の仕方、あるいは“育てる”という行動の在り方を身につけていくことについて、その萌芽となるものを包括している必要はあると、個人的意見であるが思う。

現在教育学部に在籍している学生は、旧学習指導要領で学習してきた最後の世代である。そこで

まず、現在の学生が、家庭科の保育領域に関してどのような意識を抱いているかを把握することを試みたのでその若干の結果について報告したい。

II. 方 法

- ① 調査対象：平成6年度から高校家庭科が男女共修となり、現在の大学に在学している学生が別修した最後の生徒に当たる。そこで、教育学部在学学生で小学校教職専門科目として家政科が指定している家庭科基礎研究を平成7年度後期に受講している学生を対象として質問紙調査を行った。
- ② 調査期日：平成7年度後期家庭科基礎研究の最終講義日（平成8年2月）の、講義終了時に質問紙を配付しその場で記入を求め、記入し終わり次第回収した。
- ③ 質問紙：家政科内の本年度本期の家庭科基礎研究を担当している教官内で話し合い、特に今回調査を希望した食物、被服、家族の生活と住居、保育の担当教官の4名が同時に一つの質問紙として作成した。領域の順序は、食物、被服、家族の生活と住居、保育の順で、各領域の質問の量は被服領域がB5版3頁、その他の領域は各2頁である、1頁目はフェイスシートとして学科、入学年、性別、居住場所、出身高校所在地、取得希望免許、教育実地研究を経験しているか否か等について尋ねた。保育領域では、(1)保育領域として取り上げられる可能性のある内容を29項目挙げ、最適な学校段階を、小、中、高（さらに他教科で扱うべき、または不要）のいずれと考えるか、(2)異世代との交流の経験の機会が高校までにどのくらいあったか、(3)自分の子供のころの遊びや玩具・遊具に関する思い出、(4)これからの子育てに関する意識の4点についての回答を求めた。(1)で挙げた29項目は筆者が任意に挙げたもので、家族関係学など近接領域で扱われる内容まで広く挙げた。またその内容の解釈については回答者のイメージに任せた。

III. 結果と考察

(1) 調査対象

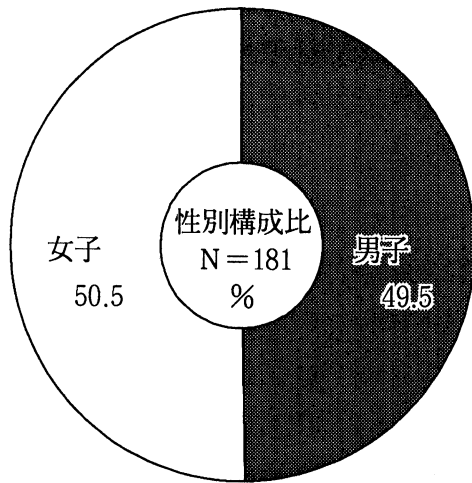
時間内に配付した184票のうち3票は、保育領域に関して全く回答がなされていなかったのを除外し、181票によって考察を行った。考察の対象とした学生の性別構成比〔図1〕、入学年別構成比〔図2〕、出身高校所在地別構成比〔図3〕、所属学科〔表1〕（課程は問わない）を示す。

(2) 小学校の家庭科の制度、中学校技術・家庭科の在り方についての男女別集計結果、および適時学校段階についての回答の単純集計結果を〔表2〕～〔表4〕に示す。

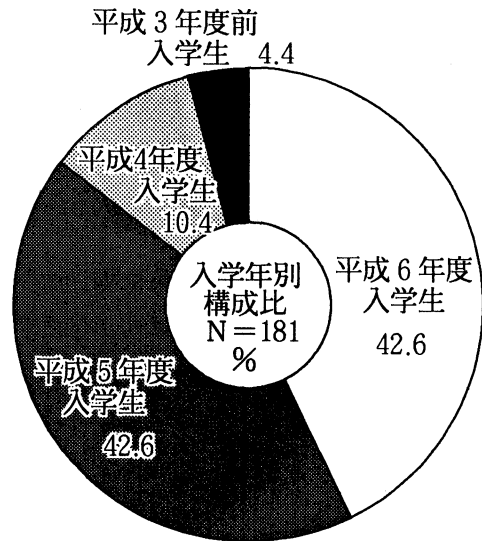
小学校家庭科については、現行の低学年の生活科を基礎に3年以降に家庭科を実施するとの考え方に賛成する者が最も多く、また、中学校においては、技術科、家庭科を独立させて、それぞれの男女共に履修させるとの考え方が最も多い。この2点について、男子学生と女子学生で有意な差は見られなかった。

29項目の中で、小学校を適時とした回答が他の学校段階に比べ高い項目は2項目で⑭基本的生

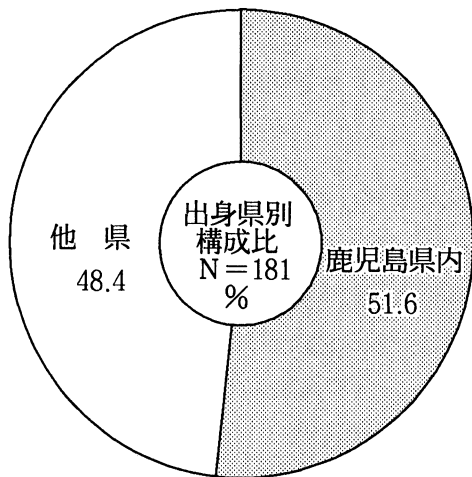
池山・長石：家庭科保育領域の適時性に関する学生の意識について



〔図1〕性別構成比



〔図2〕入学年別構成比



〔図3〕出身（高校所在地）県別構成比

〔表1〕学科別人数

教育学科	15 (8.2%)
心理学科	3 (1.6%)
国語科	21 (11.4%)
社会科	9 (4.9%)
数学科	19 (10.3%)
理科	13 (7.1%)
美術科	10 (5.4%)
音楽科	18 (9.8%)
保健体育学科	30 (16.3%)
英語科	8 (4.3%)
技術科	10 (5.4%)
家政科	2 (1.1%)
障害児教育学科	17 (9.2%)

単位：人(%) NA=6

〔表2〕性別小学校家庭科の制度の在り方

	全学年家庭科を	生活科を基礎に 3年以上家庭科	現行のまま 高学年家庭科	その他
男子	6 (6.7%)	58 (65.2%)	22 (24.7%)	3 (3.4%)
女子	4 (4.5%)	58 (65.2%)	26 (29.2%)	1 (1.1%)
計	10 (5.6%)	116 (65.2%)	48 (27.0%)	4 (2.2%)

NA=3

単位：人(%)

〔表3〕 出身県別小学校家庭科の制度の在り方

単位：人(%)

	全学年家庭科を	生活科を基礎に 3年以上家庭科	現行のまま 高学年家庭科	その他
鹿児島県内	4 (4.3%)	59 (64.1%)	26 (28.3%)	3 (3.3%)
他 県	6 (7.0%)	57 (66.3%)	22 (25.6%)	1 (1.2%)
計	10 (5.6%)	116 (65.2%)	48 (27.0%)	4 (2.2%)

NA=3

〔表4〕 保育領域の各内容についての適時

単位：人(%)

	小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不明	NA
① 子供の出生に備えて家庭での準備	19(10.6%)	53(29.6%)	90(50.3%)	5(2.8%)	12(6.7%)	2
② 生命の誕生と母性の健康を守るための配慮	28(15.5%)	78(43.1%)	59(32.6%)	12(6.6%)	4(2.2%)	
③ 乳児の養育	9(5.0%)	65(35.9%)	94(51.9%)	2(1.1%)	11(6.1%)	
④ 幼児の養育	10(5.5%)	66(36.5%)	95(52.5%)	1(0.6%)	9(5.0%)	
⑤ 子供の人間形成と親の役割	17(9.5%)	66(36.9%)	87(48.6%)	4(2.2%)	5(2.8%)	2
⑥ 新しく家庭をつくる上での配慮	6(3.3%)	51(28.3%)	103(57.2%)	2(1.1%)	18(10.0%)	1
⑦ 妊娠と胎児期	21(11.6%)	73(40.3%)	61(33.7%)	25(13.8%)	1(0.6%)	
⑧ 乳児の成長と発達の姿	14(7.7%)	75(41.4%)	71(39.2%)	16(8.8%)	5(2.8%)	
⑨ 幼児の成長と発達の姿	15(8.3%)	75(41.4%)	70(38.7%)	16(8.8%)	5(2.8%)	
⑩ 乳児の行動と活動の特徴	5(2.8%)	71(39.2%)	85(47.0%)	12(6.6%)	8(4.4%)	
⑪ 幼児の行動と活動の特徴	5(2.8%)	71(39.2%)	85(47.0%)	12(6.6%)	8(4.4%)	
⑫ 離乳食	2(1.1%)	42(23.3%)	100(55.6%)	6(3.3%)	30(16.7%)	1
⑬ 幼児の食物、間食	12(6.7%)	53(29.4%)	86(47.8%)	6(3.3%)	23(12.8%)	1
⑭ 基本的生活習慣の身につけ方	100(55.6%)	41(22.8%)	24(13.3%)	2(1.1%)	13(7.2%)	1
⑮ 子供の生活習慣と家庭の生活文化の創造	44(24.4%)	62(34.4%)	60(33.3%)	6(3.3%)	8(4.4%)	1
⑯ 地域における保育機関	11(6.1%)	63(34.8%)	85(47.0%)	9(5.0%)	13(7.2%)	
⑰ 子どもの福祉の機構と制度	18(10.0%)	44(24.4%)	99(55.0%)	12(6.7%)	7(3.9%)	
⑱ 子供の疾病とその看護、予防	14(7.8%)	44(24.4%)	95(52.8%)	18(10.0%)	9(5.0%)	1
⑲ 子供の衣服	36(20.1%)	72(40.2%)	54(30.2%)	1(0.6%)	16(8.9%)	1
⑳ さまざまな児童観	18(10.0%)	41(22.8%)	88(48.9%)	18(10.0%)	15(8.3%)	1
㉑ 児童文化財	38(21.1%)	63(35.0%)	53(29.4%)	13(7.2%)	13(7.2%)	1
㉒ 子供の遊びとその環境	40(22.2%)	66(36.7%)	60(33.3%)	5(2.8%)	9(5.0%)	1
㉓ 子供の住宅環境、家具、什器	14(7.9%)	51(28.7%)	84(47.2%)	4(2.2%)	25(14.0%)	3
㉔ 子供の表現、創作活動	26(14.5%)	53(29.6%)	66(36.9%)	22(12.3%)	12(6.7%)	2
㉕ 母性の育ち、父性の育ち	13(7.3%)	61(34.1%)	84(46.9%)	7(3.9%)	14(7.8%)	2
㉖ 高齢者の福祉の機構、制度	18(9.9%)	62(34.3%)	81(44.8%)	17(9.4%)	3(1.7%)	
㉗ 高齢者の介護	20(11.0%)	67(37.0%)	78(43.1%)	12(6.6%)	4(2.2%)	
㉘ ハンディキャップのある子どもや人	61(33.7%)	53(29.3%)	51(28.2%)	13(7.2%)	3(1.7%)	
㉙ 異なる文化で育つ子どもや人	56(30.9%)	64(35.4%)	35(19.3%)	20(11.0%)	6(3.3%)	

池山・長石：家庭科保育領域の適時性に関する学生の意識について

活習慣の身につけ方 (55.6%) と㉘ハンディキャップのある子どもや人 (33.7%) である。中学校段階を適時として回答した者が他の学校段階より多い項目としては②生命の誕生と母性の健康を守るための配慮 (43.1%), ⑦妊娠と胎児期 (40.3%), ⑨子供の衣服 (40.2%) などがあるが、全体として適時としての割合は高校が最も高い項目が多い。

これらの項目について、男子学生と女子学生、出身高校所在地が鹿児島県内か県外か、また、小学校家庭科の制度についての質問への回答と中学校技術・家庭科に関する質問への回答の4件についてクロス集計を行ったところ、性別による偏りとしては29項目中9項目に有意な差が見られた。差のあった項目について〔表5〕～〔表13〕に示す。出身高校所在地による有意な差のみられる項目はなかった。

〔表5〕性別保育領域内容の適時性

		⑩ 子供の疾病とその看護, 予防					単位：人(%)	
		小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子		13 (14.6%)	20 (22.5%)	44 (49.4%)	7 (7.9%)	5 (5.6%)	1	90
女子		1 (1.1%)	24 (26.4%)	51 (56.0%)	11 (12.1%)	4 (4.4%)	—	91

$\chi^2 = 12.14$ $df=4$ $p < 0.05$

〔表6〕性別保育領域内容の適時性

		⑨ 子供の衣服					単位：人(%)	
		小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子		26 (29.2%)	28 (31.5%)	23 (25.8%)	3 (1.1%)	11 (12.4%)	1	90
女子		10 (11.1%)	44 (48.9%)	31 (34.4%)	— (—%)	5 (5.6%)	1	91

$\chi^2 = 15.10$ $df=4$ $p < 0.01$

〔表7〕性別保育領域内容の適時性

		⑳ さまざまな児童観					単位：人(%)	
		小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子		15 (16.9%)	15 (16.9%)	38 (42.7%)	10 (11.2%)	11 (12.4%)	1	90
女子		3 (3.3%)	26 (28.6%)	50 (54.9%)	8 (8.8%)	4 (4.4%)	—	91

$\chi^2 = 16.06$ $df=4$ $p < 0.01$

〔表8〕性別保育領域内容の適時性

		㉑ 児童文化財					単位：人(%)	
		小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子		25 (28.1%)	21 (23.6%)	25 (28.1%)	8 (9.0%)	10 (11.2%)	1	90
女子		13 (14.3%)	42 (46.2%)	28 (30.8%)	5 (5.5%)	3 (3.3%)	—	91

$\chi^2 = 15.40$ $df=4$ $p < 0.01$

〔表9〕性別保育領域内容の適時性

⑳ 子供の遊びとその環境 単位：人(%)

	小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子	28 (31.5%)	23 (25.8%)	27 (30.3%)	4 (4.5%)	7 (7.9%)	1	90
女子	12 (13.2%)	43 (47.3%)	33 (36.3%)	1 (1.1%)	2 (2.2%)	—	91

$\chi^2 = 17.62$ df=4 p<0.01

〔表10〕性別保育領域内容の適時性

㉑ 子供の住宅環境, 家具, 什器 単位：人(%)

	小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子	13 (14.6%)	24 (27.0%)	35 (39.3%)	2 (2.2%)	15 (16.9%)	1	90
女子	1 (1.1%)	27 (30.3%)	49 (55.1%)	2 (2.2%)	10 (11.2%)	—	91

$\chi^2 = 13.80$ df=4 p<0.01

〔表11〕性別保育領域内容の適時性

㉒ 子供の表現, 創作活動 単位：人(%)

	小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子	18 (20.2%)	24 (27.0%)	25 (28.1%)	15 (16.9%)	7 (7.9%)	1	90
女子	8 (8.9%)	29 (32.2%)	41 (45.6%)	7 (7.8%)	5 (5.6%)	1	91

$\chi^2 = 11.43$ df=4 p<0.05

〔表12〕性別保育領域内容の適時性

㉓ 高齢者の福祉の機構, 制度 単位：人(%)

	小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子	12 (13.3%)	26 (28.9%)	37 (41.1%)	12 (13.3%)	3 (3.3%)	—	90
女子	6 (6.6%)	36 (39.6%)	44 (48.4%)	5 (5.5%)	— (—%)	—	91

$\chi^2 = 10.10$ df=4 p<0.05

〔表13〕性別保育領域内容の適時性

㉔ 異なる文化で育つ子どもや人 単位：人(%)

	小学校で	中学校で	高校で	他教科で	不要	NA	計
男子	26 (28.9%)	34 (37.8%)	11 (12.2%)	14 (15.6%)	5 (5.6%)	—	90
女子	30 (33.0%)	30 (33.0%)	24 (26.4%)	6 (6.6%)	1 (1.1%)	—	91

$\chi^2 = 11.23$ df=4 p<0.05

(3) 男子学生と女子学生の意識の差

先に見たように、本調査で挙げた保育領域の内容29項目について、男子学生と女子学生で9項目に有意な差が見られ、そのうち8項目は小学校を適時としている回答が男子学生の方に高い。そこでこの差をさらに詳しく捉えるために、29項目を、小学校を適時として回答した場合、中学校を適時として回答した場合、高校を適時と回答した場合のそれぞれを変数として、数量化Ⅲ類とクラスター分析によって、対象をグループ化し、性別、出身高校所在県別、小学校家庭科の制度についての意見別、中学校技術・家庭科の男女履修に関する意見別でグループに偏りがあるかどうかを調べた。その結果、小学校を適時とした場合のみに性別で偏りがみられた。〔表14〕は小学校を適時とした場合について各項目のカテゴリースコアをⅢ軸まで示したものである。また〔表16〕から〔表19〕に中学校と高校、それぞれを適時とした場合のカテゴリースコアをⅢ軸まで示したものと各々の固有値表を示す。〔表15〕に小学校を適時とした場合の各軸の固有値と寄与率を示したが、固有値はさほど低いものではないが、累積寄与率がⅢ軸まで30%弱であり、Ⅲ軸までのスコアでは十分なグループ化ができると考えることはできない。しかしとりあえず、さらにそれぞれのサンプルスコアによってクラスター分析を行い、5つのグループに分けたところ、グループによって男子学生と女子学生で偏りがみられた〔図4〕〔図5〕〔表20〕。Ⅰ軸からⅢ軸までのそれぞれのカテゴリースコアによって項目を並べなおしたものが〔表21〕である。これをみると、Ⅰ軸は、「子供の出生から幼児までの成育の一般的な内容」と「高齢者や特別な場合に関する内容」を、Ⅱ軸は「乳幼児そのもの」と「文化的な環境と子供との関わり的な内容」を、Ⅲ軸は「ある程度の家庭看護介護的な知識が望まれると思われる内容」と「子供の教育、あるいは心理的な知識が望まれる内容」と解釈することが可能である。この解釈に基づいて〔図4〕〔図5〕をみると、Aグループは「成育の一般的な様相、文化的な環境との関わり的な内容、ある程度の看護介護的な知識が望まれると思われる内容」により重みのあるグループ、Bグループは「高齢者や特別な場合に関する内容、文化的な環境との関わり的な内容、看護介護的な知識の望まれる内容」により重みのあるグループ、Cグループは「高齢者や特別な場合に関する内容にやや成育に関する一般的な内容よりも重みがあるが、全体に散らばっているグループ、Dグループは「文化的な環境との関わり的な内容、教育的・心理的な知識の望まれると思われる内容」に重みのあるグループ、Eグループは「乳児までの成育の一般的な内容、乳幼児そのもの、ある程度の家庭看護介護的な知識の望まれると思われる内容」に重みのあるグループとそれぞれ他のグループと比較して考えられる。〔表20〕をみるとCグループには男子学生が多く、B、Dグループは女子学生が多い。しかし女子学生と男子学生のそれぞれが適時と考える内容を推測するのはこれまでの解釈の積み重ねからしてやや強引になってしまいあまり納得できるものとは言い難い。特にDグループでは同じスコアに集中があり、学生どおし相談して同じ回答をした可能性も考えられる。また、一つには、項目のそれぞれがやや抽象的で個々の学生によって内容としてイメージしたものにかなり幅があったため、こうした項目から新しい要素を浮かび上がらせる軸ができなかった可能性が考えられる。

〔表14〕 数量化Ⅲ類によるカテゴリースコア (小学校で)

カテゴリー	I 軸	II 軸	III 軸
① 子供の出生に備えての家庭での準備	0.120164	- 0.103335	0.064469
② 生命の誕生と母性の健康を守るための配慮	0.037520	- 0.032252	0.048888
③ 乳児の養育	0.052614	0.036993	0.016279
④ 幼児の養育	0.042125	0.043718	0.014993
⑤ 子供の人間形成と親の役割	0.047759	0.029457	- 0.047950
⑥ 新しく家庭をつくる上での配慮	0.053991	0.040662	- 0.023503
⑦ 妊娠と胎児期	0.051050	0.001183	0.018193
⑧ 乳児の成長と発達の姿	0.087339	0.083381	0.027970
⑨ 幼児の成長と発達の姿	0.078827	0.080653	0.026939
⑩ 乳児の行動と活動の特徴	0.060015	0.074738	0.016401
⑪ 幼児の行動と活動の特徴	0.060015	0.074738	0.016401
⑫ 離乳食	0.011626	0.062778	- 0.042847
⑬ 幼児の食物, 間食	- 0.001962	0.030455	- 0.023118
⑭ 基本的生活習慣の身につけ方	- 0.005313	- 0.054628	- 0.033596
⑮ 子供の生活習慣と家庭の生活文化の創造	0.020527	- 0.026636	- 0.038630
⑯ 地域における保育機関	0.020719	0.038315	- 0.026195
⑰ 子どもの福祉の機構と制度	- 0.025799	0.038297	0.012781
⑱ 子供の疾病とその看護, 予防	- 0.014844	0.032771	- 0.022297
⑲ 子供の衣服	- 0.013377	0.005850	- 0.026046
⑳ さまざまな児童観	- 0.000715	0.038396	- 0.027525
㉑ 児童文化財	- 0.018353	0.008456	- 0.027072
㉒ 子供の遊びとその環境	- 0.018268	0.011626	- 0.031331
㉓ 子供の住宅環境, 家具, 什器	- 0.015268	0.025092	- 0.052217
㉔ 子供の表現, 創作活動	- 0.020672	0.014243	- 0.039701
㉕ 母性の育ち, 父性の育ち	- 0.014221	0.028131	0.033898
㉖ 高齢者の福祉の機構, 制度	- 0.055020	0.028861	0.033036
㉗ 高齢者の介護	- 0.049491	0.024811	0.044437
㉘ ハンディキャップのある子どもや人	- 0.040052	- 0.012558	0.058300
㉙ 異なる文化で育つ子どもや人	- 0.032707	- 0.006510	0.051761

〔表15〕 数量化Ⅲによる固有値表 (小学校で)

	I 軸	II 軸	III 軸
固有値	0.4243	0.3861	0.3533
寄与率	10.5 (%)	9.6 (%)	8.8 (%)
累積 %	10.5 (%)	20.1 (%)	28.9 (%)

池山・長石：家庭科保育領域の適時性に関する学生の意識について

〔表16〕 数量化Ⅲ類によるカテゴリースコア（中学校で）

カテゴリー	I 軸	II 軸	III 軸
① 子供の出生に備えての家庭での準備	0.013342⑨	- 0.015379⑳	0.001404⑰
② 生命の誕生と母性の健康を守るための配慮	- 0.002781⑮	- 0.010111㉒	- 0.028475㉑
③ 乳児の養育	0.024632⑦	- 0.014320㉔	0.005173⑮
④ 幼児の養育	0.024563⑧	- 0.007879②	0.012267⑬
⑤ 子供の人間形成と親の役割	0.013229⑪	- 0.006939⑲	- 0.002228⑲
⑥ 新しく家庭をつくる上での配慮	0.013237⑩	- 0.004388⑰	0.012025⑭
⑦ 妊娠と胎児期	0.010019⑫	- 0.012561㉓	- 0.046937㉓
⑧ 乳児の成長と発達の姿	0.030889④	- 0.005416⑱	- 0.016717㉔
⑨ 幼児の成長と発達の姿	0.031053③	- 0.000863⑭	- 0.009012㉒
⑩ 乳児の行動と活動の特徴	0.030054⑤	- 0.003707⑮	- 0.007234㉑
⑪ 幼児の行動と活動の特徴	0.031371②	0.001100⑫	0.000357⑱
⑫ 離乳食	0.039445①	0.003778⑪	0.027283⑤
⑬ 幼児の食物, 間食	0.027492⑥	- 0.000163⑬	0.030526③
⑭ 基本的生活習慣の身につけ方	- 0.008280⑲	0.052767②	- 0.004491⑳
⑮ 子供の生活習慣と家庭の生活文化の創造	- 0.025479㉔	0.072633①	- 0.065298㉑
⑯ 地域における保育機関	- 0.019729㉑	- 0.003870⑱	0.024345⑨
⑰ 子どもの福祉の機構と制度	- 0.006451⑱	0.003820⑩	0.034524②
⑱ 子供の疾病とその看護, 予防	0.003686⑬	0.015891⑧	0.014293⑪
⑲ 子供の衣服	- 0.017545㉒	0.020507⑤	0.024920⑧
⑳ さまざまな児童観	- 0.006773⑰	0.013501⑨	0.026337⑥
㉑ 児童文化財	- 0.029514㉑	0.030343③	0.003473⑱
㉒ 子供の遊びとその環境	- 0.007068⑱	0.029022④	0.012940⑫
㉓ 子供の住宅環境, 家具, 什器	- 0.001094⑭	0.017223⑦	0.036633①
㉔ 子供の表現, 創作活動	- 0.016680㉑	0.017997⑥	0.027342④
㉕ 母性の育ち, 父性の育ち	- 0.014006⑳	- 0.019110㉑	- 0.020055㉑
㉖ 高齢者の福祉の機構, 制度	- 0.039023㉑	- 0.052913㉑	- 0.023033㉑
㉗ 高齢者の介護	- 0.025952㉑	- 0.042403㉑	- 0.016077㉑
㉘ ハンディキャップのある子どもや人	- 0.041227㉑	- 0.027822㉑	0.020073⑩
㉙ 異なる文化で育つ子どもや人	- 0.045491㉑	- 0.010087㉑	0.025487⑦

注) ○囲いの番号は各軸でのスコア値の高い順をつけたもの

〔表17〕 数量化Ⅲ類による固有値表（中学校で）

	I 軸	II 軸	III 軸
固有値	0.2113	0.1708	0.1391
寄与率	11.0 (%)	8.9 (%)	7.3 (%)
累積%	11.0 (%)	20.0 (%)	27.2 (%)

〔表18〕 数量化Ⅲ類によるカテゴリースコア (高校で)

カテゴリー	I 軸	II 軸	III 軸
① 子供の出生に備えての家庭での準備	0.008916⑦	0.015259⑧	0.024385③
② 生命の誕生と母性の健康を守るための配慮	0.015363⑥	0.012369⑪	0.044031①
③ 乳児の養育	0.002665⑫	0.025241⑤	0.017030⑥
④ 幼児の養育	-0.001477⑮	0.024756⑥	0.017736⑤
⑤ 子供の人間形成と親の役割	0.005496⑧	0.012693⑩	0.003601⑫
⑥ 新しく家庭をつくる上での配慮	0.003442⑨	0.001972⑮	0.003522⑬
⑦ 妊娠と胎児期	0.003050⑩	0.022022⑦	0.037989②
⑧ 乳児の成長と発達の様	-0.018712⑭	0.033397②	-0.017878⑳
⑨ 幼児の成長と発達の様	-0.021480⑯	0.033667①	-0.023492㉑
⑩ 乳児の行動と活動の特徴	-0.016434⑳	0.026338④	-0.017719㉒
⑪ 幼児の行動と活動の特徴	-0.019605㉓	0.027240③	-0.020690㉔
⑫ 離乳食	-0.016794㉕	0.010919⑫	0.001146⑮
⑬ 幼児の食物, 間食	-0.015779⑳	0.013713⑨	-0.017450㉖
⑭ 基本的生活習慣の身につけ方	-0.024425㉗	-0.013075⑭	-0.082631㉙
⑮ 子供の生活習慣と家庭の生活文化の創造	-0.004587⑮	-0.019041㉚	-0.041268㉗
⑯ 地域における保育機関	-0.000964⑭	-0.019422㉛	0.020174④
⑰ 子どもの福祉の機構と制度	0.002787⑪	-0.028357㉜	0.013788⑧
⑱ 子供の疾病とその看護, 予防	0.000173⑬	-0.018595㉝	0.016007⑦
⑲ 子供の衣服	-0.007899⑰	-0.029601㉞	0.009140⑩
⑳ さまざまな児童観	-0.008510⑱	-0.020652㉟	0.002058⑭
㉑ 児童文化財	-0.029372㉠	-0.040725㉡	-0.005232⑱
㉒ 子供の遊びとその環境	-0.031612㉡	-0.028841㉢	-0.001459⑰
㉓ 子供の住宅環境, 家具, 什器	-0.015814㉠	-0.026162㉣	0.005137⑪
㉔ 子供の表現, 創作活動	-0.010928⑱	-0.032065㉤	-0.013976㉠
㉕ 母性の育ち, 父性の育ち	0.015733⑤	-0.012680⑱	0.000844⑮
㉖ 高齢者の福祉の機構, 制度	0.031174④	-0.006277⑮	0.010267⑨
㉗ 高齢者の介護	0.045144③	0.002285⑭	-0.007463⑱
㉘ ハンディキャップのある子どもや人	0.060700②	0.004137⑬	-0.036776㉡
㉙ 異なる文化で育つ子どもや人	0.086547①	-0.009458⑰	-0.058923㉢

注) ○囲いの番号は各軸でのスコア値の高い順をつけたもの

〔表19〕 数量化Ⅲ類による固有値表 (高校で)

	I 軸	II 軸	III 軸
固有値	0.1546	0.1460	0.0986
寄与率	12.2 (%)	11.5 (%)	7.8 (%)
累積%	12.2 (%)	23.7 (%)	31.5 (%)

池山・長石：家庭科保育領域の適時性に関する学生の意識について

〔表20〕 サンプルスコアによるクラスター分析結果からのグルーピングと性別

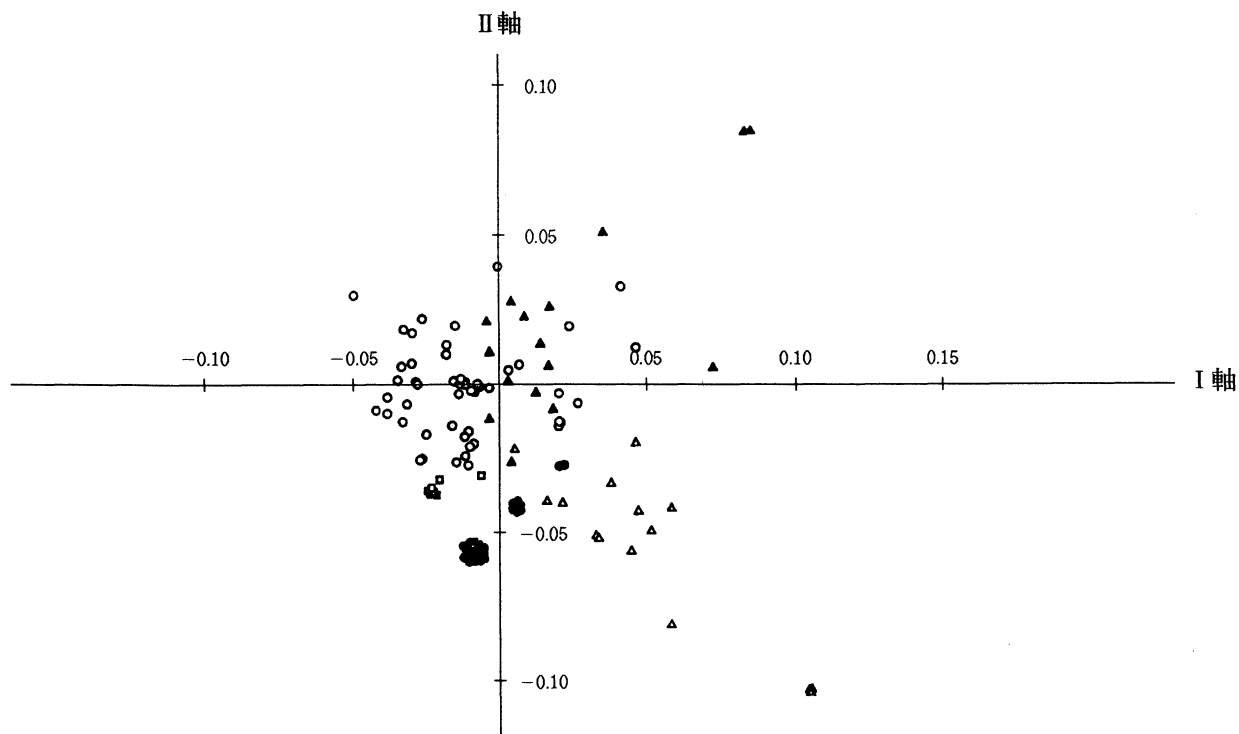
	A	B	C	D	E
男子	7 (9.5%)	0 (0.0%)	52 (70.3%)	9 (12.2%)	6 (8.1%)
女子	8 (11.1%)	7 (9.7%)	28 (38.9%)	19 (26.4%)	10 (13.9%)
計	15 (10.2%)	7 (4.8%)	80 (54.8%)	28 (19.2%)	16 (11.0%)

除外（小学校を適時とした項目が皆無の者）：35

 $\chi^2 = 18.81$ $df = 4$ $p < 0.01$

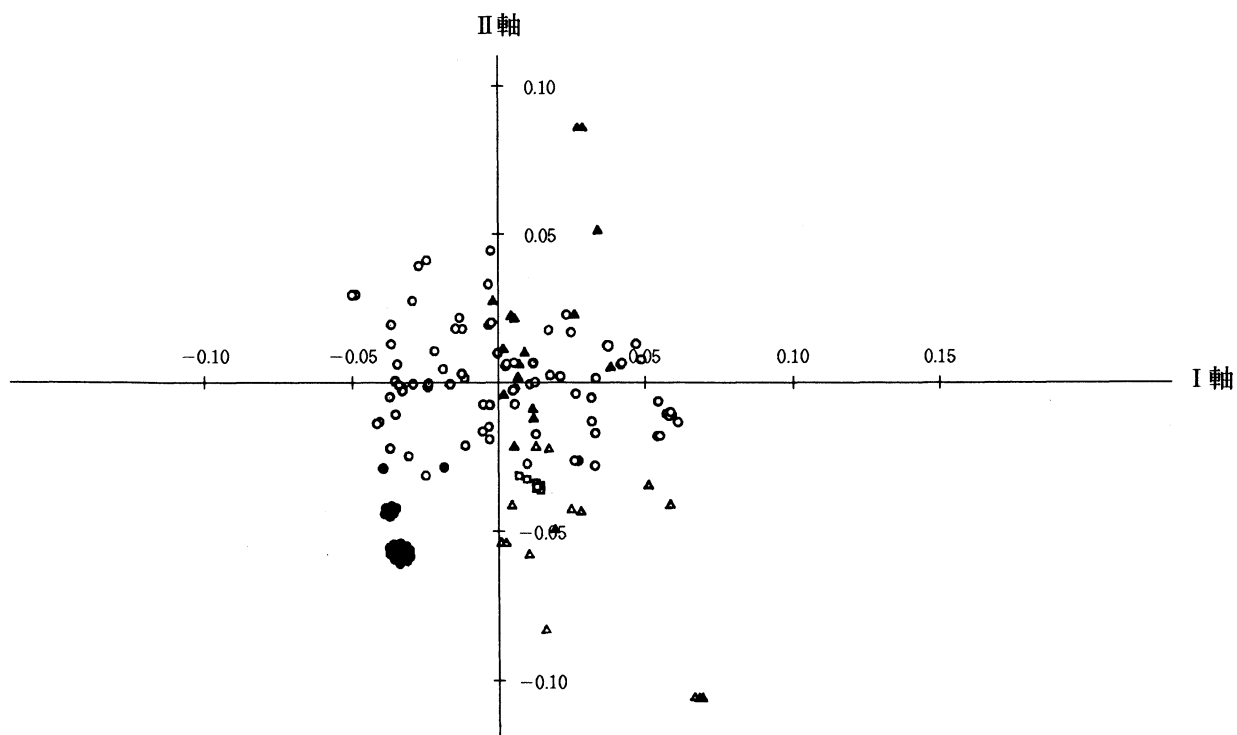
〔表21〕 数量化Ⅲ類によるカテゴリースコアによる軸別カテゴリー順の並び変え（小学校で）

I 軸	II 軸	III 軸
① 子供の出生に備えての家庭での準備	⑧ 乳児の成長と発達の色	① 子供の出生に備えての家庭での準備
⑧ 乳児の成長と発達の色	⑨ 幼児の成長と発達の色	⑳ ハンディキャップのある子供や人
⑨ 幼児の成長と発達の色	⑩ 乳児の行動と活動の特徴	㉑ 異なる文化で育つ子どもや人
⑩ 乳児の行動と活動の特徴	⑪ 幼児の行動と活動の特徴	② 生命の誕生と母性の健康を守るための配慮
⑪ 幼児の行動と活動の特徴	⑫ 離乳食	㉒ 高齢者の介護
⑥ 新しく家庭をつくる上での配慮	④ 幼児の養育	㉓ 母性の育ち、父性の育ち
③ 乳児の養育	⑥ 新しく家庭をつくる上での配慮	㉔ 高齢者の福祉の機構、制度
⑦ 妊娠と胎児期	㉕ さまざまな児童観	⑧ 乳児の成長と発達の色
⑤ 子供の人間形成と親の役割	⑬ 地域における保育機関	⑨ 幼児の成長と発達の色
④ 幼児の養育	⑰ 子供の福祉の機構と制度	⑩ 乳児の行動と活動の特徴
② 生命の誕生と母性の健康を守るための配慮	③ 乳児の養育	⑪ 幼児の行動と活動の特徴
⑬ 地域における保育機関	⑱ 子供の疾病とその看護、予防	⑦ 妊娠と胎児期
⑮ 子供の生活習慣と家庭の生活文化の創造	⑬ 幼児の食物、間食	③ 乳児の養育
⑫ 離乳食	⑤ 子供の人間形成と親の役割	④ 幼児の養育
㉕ さまざまな児童観	㉖ 高齢者の福祉の機構、制度	⑰ 子供の福祉の機構と制度
⑬ 幼児の食物、間食	㉗ 母性の育ち、父性の育ち	⑱ 子供の疾病とその看護、予防
⑭ 基本的な生活習慣の身につけ方	㉘ 子供の住宅環境、家具、什器	⑬ 幼児の食物、間食
⑲ 子供の衣服	㉙ 高齢者の介護	⑥ 新しく家庭をつくる上での配慮
㉖ 母性の育ち、父性の育ち	㉚ 子供の表現、創作活動	⑲ 子供の衣服
⑱ 子供の疾病とその看護、予防	㉛ 子供の遊びとその環境	⑬ 地域における保育機関
㉘ 子供の住宅環境、家具、什器	㉜ 児童文化財	㉜ 児童文化財
㉙ 子供の遊びとその環境	⑲ 子供の衣服	㉕ さまざまな児童観
㉜ 児童文化財	⑦ 妊娠と胎児期	㉖ 子供の遊びとその環境
㉚ 子供の表現、創作活動	㉗ 異なる文化で育つ子どもや人	⑭ 基本的な生活習慣の身につけ方
⑰ 子供の福祉の機構と制度	㉘ ハンディキャップのある子供や人	⑮ 子供の生活習慣と家庭の生活文化の創造
㉑ 異なる文化で育つ子供や人	⑮ 子供の生活習慣と家庭の生活文化の創造	㉚ 子供の表現、創作活動
㉒ ハンディキャップのある子供や人	② 生命の誕生と母性の健康を守るための配慮	⑫ 離乳食
㉓ 高齢者の介護	⑭ 基本的な生活習慣の身につけ方	⑤ 子供の人間形成と親の役割
㉔ 高齢者の福祉の機構、制度	① 子供の出生に備えての家庭での準備	㉘ 子供の住宅環境、家具、什器



〔図4〕 数量化Ⅲ類とクラスター分析によるパターン分類-2 (Ⅱ軸×Ⅲ軸)

△Aグループ □Bグループ ○Cグループ ●Dグループ ▲Eグループ



〔図5〕 数量化Ⅲ類とクラスター分析によるパターン分類-1 (Ⅰ軸×Ⅱ軸)

△Aグループ □Bグループ ○Cグループ ●Dグループ ▲Eグループ

池山・長石：家庭科保育領域の適時性に関する学生の意識について

(4) 男子学生と女子学生の保育領域に関わる経験

学校における教科としては、現男子学生は家庭科は小学校においてのみ学習しており、従って保育の学習はしていない。それだけ男子学生にとってはより保育領域の内容のイメージが固定しにくかったと思われる。

異世代との交流の経験を、学校主体、団体（子供会など）主体、私的なもののそれぞれで訪ねた結果が〔表22〕～〔表24〕である。「学校で」は女子学生に多く、これは具体的には家庭科の授業の一貫としてふれあいの体験を挙げている者が多かった。「団体主体」「私的な場面」では男子学生の方が多し。男子学生では「団体主体として」スポーツの中でのふれ合いを挙げている者が多かった。3世代同居の割合については性別では有意な差ではなかった。

異世代に対する生活感覚的な理解としては、実際のふれ合い経験の頻度や質が大きく影響すると思われるが、今回の調査の学校段階の適時性についての質問の場合、回答は教科の学習体験の有無がより大きく影響しているのではないと思われる。

〔表22〕性別異世代との交流経験－学校で

	ある	ない
男子	14 (17.7%)	65 (82.3%)
女子	32 (36.0%)	57 (64.0%)
計	16 (27.4%)	122 (72.6%)

$\chi^2 = 7.0$ $df=1$ $p < 0.01$ $NA=13$ 単位：人(%)

〔表23〕性別異世代との交流経験－団体で

	ある	ない
男子	15 (19.0%)	64 (81.0%)
女子	6 (6.7%)	83 (93.3%)
計	21 (12.9%)	147 (81.1%)

$\chi^2 = 5.74$ $df=1$ $p < 0.01$ $NA=13$ 単位：人(%)

〔表24〕性別異世代との交流経験－私的な

	ある	ない
男子	38 (48.1%)	41 (51.9%)
女子	29 (32.6%)	60 (67.4%)
計	67 (39.9%)	101 (60.1%)

$\chi^2 = 4.20$ $df=1$ $p < 0.01$ $NA=13$ 単位：人(%)

Ⅲ. ま と め

以上の調査結果とその考察をまとめると、①ここで挙げた保育領域に関する内容の多くは、高等学校、中学校段階を適時であると回答している学生が多いが、小学校段階で学習することについて全く考えられないこととしてはイメージしていない、②中学校と高校段階に関しては扱う内容について男子学生と女子学生による偏りはみられないが小学校段階で適時と考える学習内容については男子学生と女子学生で異なる傾向が見られる、③同じく内容の適時性について出身高校が鹿児島県内か否かでは差はみられない、といった点が挙げられる。男子学生と女子学生に差がみられたのは、高校までの家庭科、特に保育領域の教科としての学習経験の差によるところが大きいと思われるが

今回の調査の結果からは偏りの内容について十分な解釈に達することが困難で、この差の意味するものを特定するに至っていない。数年後新学習指導要領に沿って共修を経験してきた学生に再度調査し今回の結果と比較したい。

以前から言われていることであるが、現代は核家族化と少子化によって、年少者や高齢者を、思春期までに肌で知る機会が少なくなっている。今回の調査でも家庭科の授業で保育所等で生徒と幼児(高齢者)とのふれ合いの機会を設けている学校もかなりある一方、異世代と接した機会が殆ど記憶にない学生もいるように思われた(学校で家庭科以外で機会を設けている場合もあった)。保育領域は学習対象を直接扱うことが難しい領域であるが、現代は意図的に関わり合いの機会を設ける影響は大きいと思われる。今後学習内容だけでなく、学習方法(授業方法)についても併せ検討していく必要が大きい。

謝 辞：調査に対し誠意をもって協力して下さった学生諸君に感謝致します。

参 考 文 献

- 1) 家庭科教育研究者連盟編 小学校家庭科の授業 あゆみ出版 1979
- 2) 教員養成大学小学校家庭科研究会編 小学校家庭科概説 建帛社 1981
- 3) 藤枝恵子他著 小学校家庭科教育法(改定版)家政教育社 1991
- 4) 武井洋子他著 家庭科教育 学文社 1992
- 5) 日本家庭科教育学会新構想研究委員会 小・中・高等学校家庭科の新構想研究 - 資料編 - 家庭科教育協会 1996
- 6) 菅 民郎 多変量解析の実践(下) 現代数学社 1993